

『デイヴィッド・コパフィールド』における ウィルキンズ・ミコーバーの視線

近 藤 浩

序

小説『デイヴィッド・コパフィールド』(*David Copperfield*, 1849-50)は、作者チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) 自身の半生を素材とする作品である。執筆当時のディケンズの年齢は37~38歳である。一方、主人公であり語り手でもあるデイヴィッド・コパフィールド (David Copperfield) は35歳ほどである。小説家として成功したデイヴィッドは、自分の誕生からその年齢に至るまでの人生を読者に語る。そしてその語りの中に、ディケンズは未発表のまま執筆を中断した自伝を利用して。それゆえにディケンズのデイヴィッドに対する思い入れは強く、デイヴィッドのことばには、ディケンズ自身の考えが色濃く含まれていることが期待できるのである。

アンガス・ウィルソンは、小説中のデイヴィッドが現実のディケンズと同一人物でなく、デイヴィッドにディケンズ自身になることを強要することは、伝記的背景に関する知識を架空の作品に押し付けることであるということを前提とした上で、「……それでも、ひとりの作家の誕生を語る本の中には、勤勉によって天性の能力が磨かれたのだという主張よりも、もっと意味の深い兆候を求めることができると思う……。」

(Wilson, 174) と述べている。

上の意見に力を得つつ、デイヴィッドの内にあるディケンズ自身のことばを読み取っていきたい。そこで本小論のタイトルであるが、これは次の引用部分を読んだときに思いついたものである。この部分は、植民地オーストラリアから一時帰国したダニエル・ペゴティ (Daniel Peggotty) が持参した現地の新聞に掲載されている文章で、ウィルキンズ・ミコーバー (Wilkins Micawber) が本国の高名な作家である主人公に宛てて書いた手紙である。

「歩みを止めることなかれ！ この地において貴兄の名が知られていないわけではございませんぞ、貴兄が正当な評価を受けられないということもございません。「遠く離れて」おりますが、我々は「寄る辺ない」とも「もの悲しい」とも感じておりません、(こう付け加えてもよろしければ)「時勢に遅れている」ということもございませんぞ。進み続けられよ、鷹の飛ぶがごとく。ポート・ミドルベイ住民一同、喜びと歓待と導きの心をもって、貴兄の歩みを見つめることを切に望んでおるしだい！

「この地球の片隅から貴兄を見上げる目の中に、いつも見つかることでしょう、それに光と命が宿るかぎり、

「あの

「目が、

「治安判事たる

「ウィルキンズ・ミコーバーの

「あの目が。」(872)

ミコーバーが「目 (Eye)」という語を強調していることに興味を引かれるのである。ミコーバーのモデルがディケンズの父親ジョン (John

Dickens, 1785-1851) であることは周知の事実である。父親の陽気さ、修辞の効いた文章を書く技、経済力の低さなどが、ミコーバーの特徴となっている。そして彼は好人物であり、主人公と深い絆を持つことになる。その彼がなぜ最後に遠く離れた植民地から主人公へ視線を送り続けることを宣言することに至るのか。本小論では、その点について考察してみたい。

1

まず、本作品において視線はどのような価値を持っているのだろうか。

第2章の見出しは「私は観察する (*I Observe*)」(13) である。この章の中心は、若く美しい未亡人である母との結婚をもくろむエドワード・マードストーン (Edward Murdstone) の話である。そしてデイヴィッドは、幼い自分が見たこの敵と、言い寄られて心が結婚に傾いていく母の姿を詳細に物語る。つまり、この章は見出しの通り、何ひとつ見逃しはしないという宣言を实践する場所となっているのであり、語り手が視線あるいは見つめるという行為に対して強いこだわりを持っていることが確定される。

見ることを重視するのであれば、見られることも意識することになる。この点は寄宿学校セイラム・ハウスでの出来事によって確認できる。入学当時「8歳と9歳の間」(68) であるデイヴィッドは、6歳年上のジェームズ・スティアフォース (James Steerforth) に会う。デイヴィッドは、生徒らのボスであるこの少年から、『ロデリック・ランダム』など自分が記憶している小説の内容を彼と他の生徒たちに語り聞かせるように命じられるのだが、デイヴィッドがこの命を遂行するのは、ただスティアフォースからの視線をつなぎとめるためである。そして、次の引

用から判断できるように、この語りという営みは、デイヴィッドに、視線が自分自身の活力になることに気づかせることにもなる。

……私の部屋で一種の玩具のようにかわいがられることや、この私の技能が少年たちの間で評判になったため、そこでは最年少であったにもかかわらず、自分に大変な注目が集まっているという意識を持ったことが、私を刺激し努力させたのである。(94)

さらに、注目的になるという喜びは、デイヴィッドにとって、母の死という悲しみを乗り越える手助けにもなっていく。次の引用は、語り手デイヴィッドが、母の死を知らされた後、学校の校庭を歩く自分を思い出しているときのものである。

私は、他の少年たちの中であって自分にある種の威厳が備わった気がしたことや、苦しみの中で自分が重要人物になっていると感じたことを知っている。

もし偽りのない悲しみに打たれている子供がいるとすれば、当時の私がそうであった。しかし私は、少年たちが授業を受けていたあの午後に運動場を歩いたとき、この重要な立場が私にとってある種の満足感を与えたことを覚えている。少年たちが、授業に向かう途中、窓から私に視線を送っているのを見たとき、私は特別な人になっていると感じて、一層憂いに沈んだ様子になり、よりゆっくりと歩いたのだった。(124)

ここでは明らかに視線の力が彼を突き動かしている。母親の死亡時、デイヴィッドは9歳であるが、この時に、他者の視線が自分にとっての利益となり、周囲の期待に応えるように自分を仕向ける力になることを悟

るのである。

視線は、物語を通して、デイヴィッドの行動に影響を与えるものとして扱われる。その一例を、マードストーン・グリーンビー商会在籍時のデイヴィッドの態度に見出すことができる。

母の死後、デイヴィッドは継父マードストーンによってロンドンにあるマードストーン・グリーンビー商会に送られる。デイヴィッドは、本来なら周囲から紳士扱いを受けるべき家庭に生まれながら、弱冠10歳で肉体労働者に身を落とし、週給6〜7シリングを稼いで自活しなければならなくなるが、そのような屈辱の中にあっても、決して自ら「わが魂の密かな苦悶」(155)を仲間に見せない。「もし他の誰とも同じくらい上手に仕事ができなければ、軽く見られたり軽蔑されたりすることから逃れられなくなることを、私は初めからわかっていたのである」(162)と述べて、確実に仕事をこなしていく。弱い自分を見せないという意識、また蔑視を受けることを拒否する態度が、彼の精神を支えるのである。また、彼は、労働者仲間である子供たちから一線を画すことによって、アイデンティティを保とうとする。彼は「彼らとはすっかり親しくなったが、私の行動や態度は、彼らのものとは異なっていて、彼らと私の間に距離を置いて隔てるのに十分なほどであった。」(162)と述べて、特別扱いされることに何の異議も表明しない。彼は特別視されることを求めているのである。これに関連して、彼が仕事仲間から「小さな紳士」(162)とか「サフォークの若旦那」(162)と呼ばれている(仮にも商会オーナーの義理の息子だからであろう)という話を付け加えたい。彼がそのように呼ばれることについては、次の研究者の意見がある。「最小限ではあっても、それで彼は自尊心に満足を感じているのであり、それを失うまいとする意地こそ、彼における成功への野心の原動力にほかならなかったのである。」(松村, 130) この意見に全面的に賛成である。商会にいる間は、このささやかな特別視も、彼にとっては栄養源となる

のである。

商会在籍時以後の人生においても、視線がデイヴィッドを行動させる。彼は商會を密かに抜け出して、大伯母ベッツィー・トロットウッド (Betsey Trotwood) が住むドーヴァーに向かうが、その行動の最後のきっかけとなるのは、「あまりにもお互いに親しんでいるため、困難なときにあっても離れられない」(166) ミコーバー一家との別れである。大都會で唯一自分を見つめてくれる視線を失った直後に、彼は旅立つのである。そしてこの旅は、所持金が乏しく、身に着けている服を売って食料を買い、野宿しながらの徒歩旅行である。苦しい旅の途中で、彼は亡き母の若いころの姿を思いだし、それに「支えられ導かれ」(188) する。母が注いでくれた視線を励みにしていることは疑いない。またこの旅においては、彼がそれ以外の視線も想定していることが推測できる。母の死後、継父のもとで全くの孤独感を味わっているころ、彼が「物語の主人公のように、立身出世を求めてどこかへ行くこと」(134) を真剣に考えていたことに注意したい。主人公は読者の視線を一身に集める存在である。まさに冒険と言えるドーヴァーへの旅において、デイヴィッドは自らを物語の主人公に仕立て、想像上の読者の視線を感じているのに違いないのである。そのようにしてたどり着いたドーヴァーで、彼は大伯母の庇護を獲得し、カンタベリーにあるストロング博士 (Dr. Strong) の学校に通うことになるが、そこで彼の向上心に火をつけるのも、また視線である。育ちの良い同じ年頃の仲間の中であって、彼は「彼らが決して知ることがないであろう場面を通り抜けてきたことをあまりにも意識していたので、普通の小さな生徒としてそこに来るのは詐欺行為なのだ」と半ば信じていた」(228) と言う。彼には、肉体労働者としての経験が自分の立ち居振る舞いに表れてしまい、その経験が露見するのではないかという恐怖感がある。彼は勉学に励み、やがて首席の地位を占めるまでになるが、そうした努力の引き金になったのは、普通の中産階級の

子供として見られたいという思いなのである。やがて彼は教養を身につけ、17歳で学校を離れ、ロンドンの法律事務所に勤め、議会速記者となり、21歳で著述業に手を付けて初めての作品を雑誌に投稿し、以後着々と作家としての名声を築いていく。自分の作品が人気を博しても、彼が最も心がけるのは、彼の読者たちからの彼への視線を保つということである。これは次の引用を見ればわかるであろう。

私が人間性を観察してきたところによれば常に、自分を信じるに十分な理由を持つ男は、他の人々に自分を信じてもらうために、決して彼らの面前で自分をひけらかさないものなのだ。この理由により、私は自尊心の中に謙遜を保ち、賞賛を得れば得るほど、ますますそれを受けるに値するように努めた。(690)

彼は、読者が作品だけでなく作家本人にも注目していることに気づいているから、謙遜の心を失うまいとする。その心を持っていることを読者に伝えるには、読者の声に耳に傾け、彼らの期待に応える作品を書かなければならない。彼はそうすることを最重視しているのだ。それゆえに、彼の作品の内容は紹介されないのだが、彼は難解な作品を書くタイプの作家にはなりえない。読者が彼を見上げる目こそ、彼にとっての賞賛であるから、彼は常に彼らの視線に敏感な作家にならざるをえない。

デイヴィッドの人生は、好意の視線を求めるためのそれであるが、彼は物語の終盤に最も必要とする視線を我が物とすることになる。それは、ほぼ同い年のアグネス・ウィックフィールド (Agnes Wickfield) の視線である。アグネスはデイヴィッドが認めるように、彼の「カウンセラー兼友人」(268)である。彼女を自分の導き手として見てしまうために、彼は自分に対する彼女の密かな恋心に気づかない。それどころか、恋の盲目によってドーラ・スペンロウ (Dora Spenlow) を溺愛し、この娘と

結婚するときも、彼はアグネスの助力を求めてしまうのである。結婚後、ドーラが家計を切り盛りする能力に欠けた「幼な妻」(643)であることが判明する。観察を得意とする彼も、女性を見る目はなかったわけである。しかし、ドーラの死への悲しみ、スティアフォースの死への悼み、ミコーパー家及び漁師のペゴティー一家との別れの寂しき、そして3年間の海外生活における省察を経て、デイヴィッドは、アグネスを愛する気持ちと、彼女という存在の貴重さに気づく。そして人間として成長した彼に、彼女の愛が与えられるのである。以下の引用は、彼が彼女の思いに気づき、愛を打ち明けた後の場面のものである。

「僕がドーラを愛したとき—かわいくてたまらなくてね、アグネス、きみも知っているように—」

「知っているわ！」と、彼女は真剣に叫んだ。「それを知っていることが、私は嬉しいのよ！」

「僕が彼女を愛したとき—あの時だって、僕の愛は、きみの賛成がなかったら、不完全なものだったろう。きみの賛同を得て、僕の愛は完全なものになったんだ。そして彼女を失ったとき、今でも、もしきみがいなかったら僕はどうなっていたんだらうって、思うんだ！」

より強く私の腕に抱かれ、さらに私の心臓の近くに顔を寄せ、震える手を私の肩に置き、涙の奥で輝く彼女の優しい目が、私の目に映っていた！（862）

最後の部分では、ことばの並び順から考えると、彼女の目が最も強調されている。かつてデイヴィッドは、アグネスを「教会のステンドグラス」(223)に例えていた。ステンドグラスは聖書に載っている話を信者に伝えるものであり、崇めるように見上げるものだ。上の場面は、そのような高みにあると思っていた彼女の視線が、見つめるだけだった彼女の目

が、今や彼に注がれることになったことを伝えている。彼女の視線は、自分への注目を求めてきた彼にとって、それまでの人生で最高の報酬であると言えよう。

視線は報酬になる一方で、苦痛になることもある。デイヴィッドはマードストーンからネグレクトを受けたときに、無視される苦痛は十分味わっている。また先ほど触れたように、彼は、ストロング博士の学校に入学したとき、他の生徒たちからの視線に怯えた経験がある。そして卒業後、彼は、スティアフォースの召使リティマー（Littimer）の前にいると、「自分が他の誰よりも青くて経験の足りない人間に思えた」(301)と言い、立ち居振る舞いが完璧に見える男から蔑視を受けていると感じ、自らの若さ（威厳のなさ）に悩んでしまう。さらに、彼は肉体的ハンディキャップをかかえた女性モウチャー（Mowcher）からするどい視線を浴びつつ、「……もし私が普通のサイズの女だったら、あなたは私を信用しないこともないでしょう。あなたにはそれがわかっているんだわ！」(464)と言われ、自分が好奇心のある目で彼女を見ていたこと、そして、その視線が彼女を傷つけていたことに気づかされて恥ずかしく思う。これらの経験を持つデイヴィッドは、視線がもたらす負の効果を十分に理解していると言える。

2

視線のもたらす正負の効果を知るデイヴィッドは、はたして意識的に視線をコントロールしようとするだろうか。

その可能性を感じさせてくれるのが、漁師ペゴティの姪エミリー（Em'ly）を誘惑して彼女と駆け落ちしたスティアフォースに対する、デイヴィッドの思いである。彼は「私の中であって自然なものは、他の多

くの人たちの中にあっても自然だと思うから、私は、自分をステイアフォースに縛り付ける絆が切れてしまったときほど、彼を愛したことはなかったと書くことを恐れはしない」(455) と言い、さらに「彼が持っている私についての思い出がどのようなものであったのか、これについては私には知る機会がなかった—おそらくその思い出は軽いもので、容易に忘れ去れるものであったろう—が、彼についての私の思い出は、亡くしてしまった大切な友人についてのそれであった。」(455) と述べる。彼は、ペゴティの家庭を破壊したステイアフォースを、もはや直接に非難することが不可能な死人として見つめることによって、自分の心の中にこの親友に対する憎しみの視線が発生することを防いでいるのである。これは視線のすり替えであると言えるだろう。

また、捨てられ、ロンドンの貧民街にいたエミリーを、ペゴティが救出する場面においても、デイヴィッドは視線をコントロールしているように思われる。マーサ (Martha) からエミリーを発見して貧民街に匿っているとの知らせを受けたデイヴィッドが彼女のいる部屋に駆けつけると、そこではステイアフォースを愛するローザ・ダートル (Rosa Dartle) がエミリーを激しく非難し、彼女にどこまでも追い詰めてやるという内容の言葉を浴びせかけている。デイヴィッドは彼女たちから自分の姿が見えない位置に隠れて、その二人の女性のやりとりを聞いているのだが、彼はそこへ急いでいるだろうペゴティの到着を待つばかりで、行動を起こさない。以下の引用は、語り手デイヴィッドがその場面に添えた自分の心中についての解説である。

私はどうすればよいかわからなかったのだ。この会見を終わらせたいと強く願いはしたが、私には自分が姿を現す権利がないと、彼女の姿を見て彼女を取り戻せるのはペゴティさんただ一人だと感じたのだ。彼が来ることはないのだろうか？ 私は待ち遠しさを感じつつ、そう

考えた。(718)

この場面に関連して、ジョン・ルーカスの次の意見を引用しておきたい。

『デイヴィッド・コパフィールド』に対する一人称の語りの採用は、ディケンズが確実に彼自身を主人公の中にいさせるための方法の一つにすぎない。この方法が、いくつかの大変ぎごちない瞬間一例としてはローザ・ダートルとエミリーの間のきわめて重要な場面が挙げられる。我々がその場面を知りたいと願うならデイヴィッドはその内容を立ち聞きしていなければならないわけだが、彼としてはその場面を防がなければならないはずだ—を創り出しているのは疑いない。しかし大部分に関しては、一人称の語りは十分うまく機能しているように思える。(ルーカス, 168)

確かにデイヴィッドが現場に最初にはせ参じていながらエミリーを助けないこの場面は、「ぎごちない」かもしれない。読者がまさに主人公の勇敢な活躍を期待したい場面である。しかし先のデイヴィッドのこぼにあるように、彼はエミリーの前に姿を現す権利がないと感じている。その第一の理由は、数年間彼女を探し歩いたペゴティこそ救い主として適格だからということであろう。第二の父として彼女を育てたペゴティにはそうなる資格が十分ある。しかし、それだけでは、デイヴィッドがかつて愛した女性の窮地を長々と傍観している理由として不十分である。エミリーはスティアフォースと駆け落ちすることで相手と同じ地位まで引き上げてもらっていたのだが、デイヴィッドはスティアフォースと同じ階級に属する人間である。しかもエミリーはデイヴィッドがスティアフォースの友であることを知っている。そんな立場にあるデイヴィッドの姿は、彼女の救いにはなりえない。デイヴィッドは階級の違い

を意識する人間だけに、その点を理解している。それゆえ、彼は彼女の気持ちを考え、彼女の視界に入らないという選択をしたのだと言える。後に、彼女の元婚約者で、ペゴティの甥であるハムから、彼女に会うつもりはあるかと問われたとき、デイヴィッドは「それはおそらく彼女にとってあまりにも辛いだろう……」(737)と述べて、彼女に会わないという意志を貫く。このことから、彼が意識的に見る・見られるという行為をコントロールしていることがわかる。

他者の視線をコントロールした例としては、デイヴィッドがハムとステアフォースの死を、移民のための渡航を目前に控えたペゴティらに伝えないと決意したことが挙げられよう。嵐の中、ヤーマスの海でハムとステアフォースは出会い、共に波に飲まれて死を迎える。しかし、デイヴィッドは、ペゴティやエミリーが心置きなく旅立てるよう、彼らの目をその事件から逸らす努力をし、それに成功するのである。

3

デイヴィッドが視線の正負の効果を知り、視線をコントロールすることはわかった。もちろんディケンズがデイヴィッドにそうさせているのである。そんなデイヴィッドは実の父親とミコーバーにどのような視線を向けるだろうか。

幼いころ、デイヴィッドの目には父の墓が彼と母親のいる暖かい居間から寂しそうに閉め出されているように見え、彼はそのことに「なんとも言いようのない哀れみ」(2)を感じたのであるから、目にしたことのない父に対する同情の念は持っている。彼にとっては、父は少なくとも家族の一員として同じ居間にいてよい存在なのだ。

となれば、物語の中のところどころで、デイヴィッドが父親に思いを

寄せる場面があってもよさそうなものだ。しかし、第1章以降、登場人物としてのデイヴィッドは、父親への関心をほとんど示さない。彼は、葬儀屋オーマー（Omer）が父親と長い間の知り合いだと言ったとき（9章）も、医師チリップ（Chillip）から父親とそっくりだと言われたとき（59章）も、決して彼らに父親の詳しい情報を求めないのである。意識的に父親の話題を避けているとしか思えない。

しかし、そうだからといって、デイヴィッドが父親のことを忘れているわけでもない。彼が、彼を引き取ろうとするマードストーン姉弟の眼前で、大伯母トロットウッド（デイヴィッドは彼女に話しかける際、伯母という呼称を用いる）に庇護を求める際、次の引用のように言ったと述べているからだ。「……私は伯母に—今ではどんなことばを使ったのか忘れてしまったが、当時は自分の言葉に感動したことは覚えている—どうか父のために私の友人になり、私を守ってほしいとひたすら懇願した。」(212) 実際、このことばで大伯母の庇護を獲得するわけであるから、彼は父親から大きな援助を受けたことになる。しかし、他のことは実によく記憶している彼が、父親について言ったことばだけは忘れてるのは、いかにも奇妙である。父が彼に遺してくれた蔵書（彼の孤独を癒し、彼の想像力を豊かにした何冊かの物語）にしてもそうだが、彼は亡き父から得られる恩恵だけを受け取って利用し、亡き父親への思いは自分だけの胸に秘めておくのである。

デイヴィッドが亡き父親に送る視線に負の感情は込められていない。むしろ彼は父親を、天国から彼を見つめ、間接的サポートをくれた人と見ているだろう。彼が物語の冒頭で次のように語っているからだ。「今でも、父は私を一度も見たことがないのだなあと考え、私は奇妙な感覚を覚える……。」(2) この奇妙さは意外さに等しい。彼の心の中に、自分が現在に至るまでの道のりを父親がどこかから見守ってくれたのだという意識があるからこそ、上のことばが出てくるのだ。

結局、ディケンズがデイヴィッドに許可したのは、父親が存在したことを意識しつつ、ある程度の敬意と感謝を込めて父親を見続けることだ、ということになる。これには、ディケンズ自身の父親への思いが影響していると考えられる。この点を確認するために、まずはディケンズが書きかけて中断した自叙伝の一部を見てみたい。引用したのは、両親から靴墨工場へ働きに行かされていたころのディケンズの思いが書き記された箇所である。

「どうやったらあのような年齢の私をあんなにもあっさりと置き去りにできたのか、私には不思議でならない。私たち一家がロンドンに出てきてから、私はあくせく働く哀れな小僧に成り下がってしまったのだが、そうなった後でさえ、私一まれに見る才能を備えた子供で、物覚えがよく、熱意があり、繊細で、体も心も傷つきやすかった—に十分同情してくれ、やろうと思えば確かにできたのだから、何か節約できるものは節約して、どんな二流の学校でもいいからそこへ私を入れてやれば良かったろうに、と言ってくれる人が誰もいなかったことが、私には不思議に思えるのだ。私たち一家の友人たちは疲れ切っていたのだと思う。誰もそんなそぶりを見せなかった。父も母もすっかり満足していた。もし私が20歳で、グラマー・スクールで抜群の成績を取り、ケンブリッジに行くことになったとしても、両親はあれ以上には満足することはなかっただろう。」（フォスター、I、21）

この部分は形を変えて『デイヴィッド』の11章冒頭に組み込まれている。デイヴィッドがマードストーン・グリーンビー商会で味わっていたのと同じ社会的転落の屈辱を、ディケンズは12歳のとき（1824年）に靴墨工場で感じていたのである。そして彼をこのような境遇に落とした原因は、一家の大黒柱であるべき彼の父親の経済力のなきにあった。父親は、短

い期間(1824年の数か月間)だがマーシャルシー債務者監獄に拘留され、囚人になったこともある。こうした子供時代の辛い経験は、ディケンズの中で深い心の傷となって残った。ディケンズは優しくして寛大な父親を深く愛していたし、労働の辛さを父親に告白することもなかった。しかし、彼が息子である自分の心痛に気づきもしない父親に密かに怒りを感じていたことも否定できない。愛しているが面と向かえば憎しみも感じる相手に対する有効な措置のひとつは、その相手と距離を置いて接することである。デイヴィッドと会うことのない父親の間に、この距離を見出すことができる。ディケンズは、デイヴィッドに、父親を愛と敬意だけを抱いて見つめられる距離を保たせているのである。

自伝断片に登場するディケンズの父親は、『デイヴィッド』ではミコーバーに姿を変えている。陽気で楽天的でお人好しで家族思いだがいつもお金に困って借金しているという点で、ミコーバーはディケンズの父親の分身である。そしてデイヴィッドはディケンズの分身である。これらふたりの作中人物が血縁関係抜きで家族的な交流をするというところにも、ディケンズが設けた距離を感じることができる。

ただし、デイヴィッド自身がミコーバーと距離を置くようになるのは、デイヴィッドがマードストーン・グリーンビー商会を逃げ出して、大伯母のもとへ行った後のことである。商会に勤めているときは、この小論の1章で触れたように、デイヴィッドにとって、ミコーバー夫妻は彼に家族同然の視線を注いでくれる貴重な存在である。デイヴィッドはミコーバーの窮乏ぶりに心を痛め、ミコーバーが負債を払えずキングズ・ベンチ監獄に入れられたときには、その監獄に通い、悲しみを共有する。デイヴィッドはその時の様子を「ミコーバー氏は門の内側で私を待っていてくれた。それから私たちは彼の部屋(上から2番目の階にあった)へ行き、二人して大いに泣いた。」(165)と語る。ディケンズと彼の父親がマーシャルシー監獄で経験したことが、デイヴィッドとミコーバーの間

で再現されるのであり、この二人の間には父子の間に交わされるものに近い視線が存在している。

ところがカンタベリーで学校に通いだすと、デイヴィッドのミコーバーに対する視線は少し変化する。デイヴィッドがユライア・ヒープ (Uriah Heep) の住処に招かれてお茶を飲んでいるとき、ロンドンへ帰る途中にこの町に立ち寄ったミコーバーがヒープの住処の入り口を通りかかり、デイヴィッドに気づいて家の中に入ってくる場面がある。この瞬間についてデイヴィッドは「私は、そこでミコーバー氏と会って嬉しかったとは言えない—本当にそう言えないのだが、彼に会えて嬉しいという気持ちもあったので、心を込めて彼と握手をし、奥さんはいかがですかと尋ねた。」(257) と、複雑な心境を読者に打ち明ける。これは、デイヴィッドが自分の過去をミコーバーによってヒープの前で話されるのを望まないからである。デイヴィッドは、ミコーバーがよりによってこんな間の悪い訪問をしてくれなくても良いのにと願ったことであろう。ミコーバーへの親愛の情に変わりはないものの、デイヴィッドはミコーバー一家が宿泊している旅館を離れてロンドンへ向かっていくのを自分の目で確かめると、「こんな風にして、重荷が私の心から降ろされ、私は学校への一番の近道である裏通りへと曲がった。そして私は、今もなお彼らのことは大好きだったにもかかわらず、概して、彼らが行ってしまったことに安堵を覚えた。」(264) と言うのである。さらに、17歳になったデイヴィッドは、ロンドンの下宿でミコーバー夫妻と友人トミー・トラドルズ (Tommy Traddles) と一緒に焼き肉パーティーをして楽しんだ後、その夫妻の家に下宿しているトラドルズに「……ミコーバーさんには何の悪気もないんだ、あの気の毒な人にはね。でも、もし僕が君だったら、あの人には何も貸さないがねえ。」(423) と、賢しらかな助言をしている。もはや、デイヴィッドにとって、ミコーバーは愛すべき厄介者とも呼ぶべき存在になっており、デイヴィッドは、年齢を重ね

るにつれ、ミコーバーに対して一定の距離を置くようになるのである。

一方、ミコーバーは、デイヴィッドを近い存在と思いつけ、二人の関係に何の修正も必要とは思わない。ミコーバーにとって、デイヴィッドは「わが青春時代の友にして、過ぎ去りし日々を共に過ごした仲間」(407)であり続けるし、デイヴィッドからも（そしてディケンズからも）関係の修正は求められない。

ミコーバーについて確認しておきたいことがもうひとつある。それは彼がデイヴィッドに対し何らかの支援をしているか、ということだ。この点については、ミコーバーのヒーブへの挑戦を見てみればいい。

ミコーバーはヒーブに雇われる。ヒーブはウィックフィールドの経営する法律事務所の書生であったが、健康を損ない思考力の鈍ったウィックフィールドを騙し、事務所の共同経営者に成り上がる。ヒーブは、ウィックフィールドが運用の失敗によって顧客から預かった資金を失ったという事実をでっちあげ、自分の助けがなければ仕事が立ち行かないとウィックフィールドに信じ込ませ、その地位を得たのである。そしてヒーブはウィックフィールドの財産のすべてを奪い、彼の娘アグネスをも手中に収めよう画策する。これに対し、主人公デイヴィッドは何もできない。デイヴィッドは、アグネスを狙っていることをほのめかず策士ヒーブを前にして、「こいつには敵わないという突然の感覚」(379)に襲われたことがある。また、ストロング博士の妻アニー (Annie Strong) はアグネスと親しくしているのだが、ヒーブはアニーが自分を快く思っていないと知り、彼女をアグネスに会わせないようにするため、博士とウィックフィールドの前で、アニーと彼女の従妹のジャック・モールドン (Jack Maldon) の仲が怪しいという疑惑を示す。ヒーブは、娘を溺愛するウィックフィールドが、この疑惑のゆえにアグネスをアニーから遠ざけるだろうと読んでいるのだ。そしてヒーブはこの疑惑を確立するためにアニーとモールドンに関するデイヴィッドの証言も利用するので

ある。これに対してデイヴィッドができた唯一の反撃はユライアの頬を叩くということだけである。デイヴィッドはまったくユライアに歯が立たない。この無力なデイヴィッドに代わって、ヒーブと戦うのがミコーバーなのである。ミコーバーは膨大な精力を注ぎ、帳簿や書類を精査してヒーブの不正を調べ上げ、弁護士トラドルズの助力を得て、ヒーブの悪行を白日の下に曝すことに成功する。デイヴィッドは、これでアグネスが救われたことを思い、「……私をミコーバー氏に知り合わせてくれた若き日の苦難に心から感謝した」(761)と語る。ミコーバーの努力によって、デイヴィッドの将来の、そして生涯の伴侶となるアグネスが救われたのだから、ミコーバーは間接的にデイヴィッドの人生に対して最大の貢献をしていることになるのである。

こうしてみると、デイヴィッドは実の父親とミコーバーに対して、同じ内容の心の声を発していることがわかる。それは、親しみ(愛情)を感じており、間接的にもせよ援助をくれたことに感謝しているが、距離を置いて自分を見守ってほしい、というものである。そして、これは、ディケンズが完全には許すことのできない自分の父親に対して発しているメッセージとも解釈できる。

結 論

ミコーバーは、デイヴィッドの第二の父にはなれないが、デイヴィッドに強い親しみを抱き、彼の人生に貢献する。それにもかかわらず、ミコーバーは家族と共にオーストラリアへ移民し、再び本国に戻ることはない。彼の妻は、いつの日か海外で成功して帰国したいという願いを夫にもデイヴィッドにも熱を込めて伝えている(57章)が、彼女の願いはかなえられない。デイヴィッドの心の声に応じるように、ミコーバー

ははるか彼方からデイヴィッドを見つめることを許されるだけなのである。序論で引用したミコーバーからの手紙について、ジェフリー・サーリーはその手紙から聞こえる声の中に「ことばで説明できない悲しみ」(サーリー, 171) があると言う。確かに、ミコーバーがデイヴィッドから遠く離れ、もはや思い出の中だけの存在になってしまうと考えると、一抹の寂しさを感じる。しかし、ミコーバーはこの手紙で、常に自分の目がデイヴィッドを見つめていることを、デイヴィッドに意識させる。視線から活力を得るデイヴィッドが、期待を込めて自分を眺める目の存在を忘れることはない。この二人は距離を置き、見る・見られるというだけの関係になることによって、親しみと喜びだけを与え合う間柄になるのである。ミコーバーとデイヴィッドは、ディケンズから見れば、父と自分の分身である。それゆえディケンズは、ミコーバーとデイヴィッドは視線を送り合うだけの関係が最良であることを示すことによって、愛憎交錯する父と息子の関係への処方箋を提示していると思われるのである。

引用・参考文献

- Dickens, Charles. *The Oxford Illustrated Dickens: David Copperfield*. Oxford: Oxford UP, 1948.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. 1872-4. Ed. A. J. Hoppe. 2 vols. London: J. M. Dent & Sons, 1966.
- Lucas, John. *The Melancholy Man*. 1970. Sussex: The Harvester Press, 1980.
- 松村昌家. 『ディケンズとロンドン』. 東京: 研究社, 1981.
- Thurley, Geoffrey. *The Dickens Myth: Its Genesis and Structure*. New York: St. Martin's Press. 1976.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. 1970. London: Panther Books, 1983.

